

タイトル『ゴージャスお宝鑑定家〜う〜ん、  
ゴージャス!』14』

## 登場人物

- 剛田（ごうだ）..

ゴージャスな品物しか鑑定しない「剛田質店」の店主。優雅な所作と哲学を持ち、何よりも美を愛する。口癖は「ゴージャス!」で、価値観は極端に独特。周困には「クセが強すぎる」と思われているが、本人は全く気にしていない。

- 白金（しろがね）..

剛田質店の見習い鑑定士で、剛田とは対照的に常識人。神経質かつ心配性で、剛田の強烈なテンションや独特の価値観に毎度振り回されている。お宝そのものは大切に思うが、商売としての現実も気にしている。

• お客…

中年男性。祖父の遺品である「アメジスト製の包丁」を持ち込み、どう扱うべきか悩んでいる。剛田のゴージャス哲学に困惑しつつも巻き込まれていく。

## 第一幕：豪華な朝の始まり（20分）

（剛田質店の店内。豪華なシャンデリアの下、

剛田が紅茶を飲みつつ語る。）

剛田：「白金くん、見たまえ。この紅茶の色、この芳香。これがゴージャスというものだよ。」

白金：「（書類を片手に）剛田さん、いい加減にしてくれませんか？朝から紅茶の話ばかりしてないで、手伝ってくださいよ！」

剛田：「紅茶は朝の儀式だ。これなくして一日を始めることなどできない。」

白金：「儀式とか言って、ただの優雅な朝食

ですよね？こっちは今日来る予定のお客さんの確認してるんですけど。」

剛田…「お客の数など気にする必要はない。

我々が見るべきは、お宝の“質”だ。ゴージャスたる品物にこそ、我が魂は震える。」

白金…「魂が震えたところで、ちゃんと値段つけられなきゃ意味ないですけどね。」

剛田…「白金くん、それが君の悪いところだ。

美しいものには値段をつけるのではなく、その価値を感じるのだ。」

白金…「（皮肉気味に）ええそうですね。

でも、先月の“価値のある”品、全然売れてませんけどね！」

剛田…「売れなくてもいいのだ。それは私たちの手元にあるだけで、この店を輝かせる。」

白金…「（ため息）それじゃ商売にならないんですけど……。」

（突然、ベルが鳴り、剛田が急に立ち上がる。）

剛田：「来たぞ、白金くん！ゴージャスの予感がする！」

白金：「予感って……いや、普通にお客さんですからね。」

---

## 第二幕：謎のお宝登場（25分）

（包みを抱えた中年男性が入店。）

お客：「こんにちは。ちょっと相談したいことがあるんですが……。」

剛田：「ようこそ、剛田質店へ！さあ、あなたのお宝を見せたまえ！」

白金：「（内心の声）またテンション高いなあ……。」

お客：「えっと、これ祖父の遺品なんですけど……。」

白金：「（書類を片付けながら）どれどれ……」

おお、結構大きいですね。その包み。」

お客：「そうなんですよ。結構重くて……。」

も捨てるにはちょっと惜しい気もして。」

剛田：「捨てるだと！？なんと愚かなことを考えるのだ！」

白金：「いやいや、剛田さん、まだ中身見てないですから落ち着いて！」

剛田：「いいや、すでにこの包みに宿るオーラを感じている！」

白金：「オーラとかどうでもいいので、さっさと中身を見ましようよ！」

お客：「苦笑いしながら包みを開ける。」  
「これなんですけど……。」

（紫に輝くアメジストの包丁が現れる。）

剛田：「……うーん、ゴージャス！」

白金：「（驚愕して）いや、包丁じゃないですか！？しかも石でできてるし！」

お客：「祖父が集めてたもので……正直、使い道も分からなくて。」

剛田：「使い道など関係ない！この美しさ、見よ！触れてみよ！これはただの包丁ではな

い、芸術だ！」

白金：「いやいや、ただのゴツい包丁ですよ

ね？これ、絶対料理には向いてないです

よ！」

剛田：「白金くん、物事は表面だけで判断し

てはならない。この輝きに込められた職人の

魂を感じないのか！」

（剛田が熱弁を始め、お客が呆然とする。）

---

### 第三幕：実際に使ってみる（25分）

（剛田が包丁を持ち、キッチンへ向かう。）

白金：「ちよ、ちよっと待ってください！剛田

さん、まさかそれ使う気ですか！？」

剛田：「もちろんだ。この包丁の真価を試さ

ずしてどうする。」

白金：「いやいや、割れたらどうするんです

か！石ですよ、石！」

剛田…「白金くん、リスクを恐れているのは美の本質には辿り着けないのだ。」

白金…「いやいや、そんな哲学いらないから！  
傷ついたらどう責任取るんですか！」

剛田…「安心したまえ。この剛田が持つ以上、何も傷つけはしない。」

（豆腐を取り出し、剛田が慎重に包丁を振る。）

白金…「やめてってば……ああっ！」

剛田…「……見よ、この断面！」

白金…「……切れた！？そんな馬鹿な！」

剛田…「ただ切れただけではない。この滑らかさ、輝き。これをゴージャスと言わずして何と呼ぶ！」

---

エピローグ…ゴージャスな豆腐の味（五分）

（切った豆腐を剛田が食べ、深く息を吸う。）

剛田：「……うん、ゴージャス！」

白金：「だから味に“ゴージャス”ってあるんですか！」

剛田：「白金くん、これが芸術の力だ。

食べてみたまえ。」

白金：「（しゅしゅ一口食べて）……う、うまい！？なんでこんな滑らかな食感なんですか！」

剛田：「それがこの包丁の力だ。ゴージャスの世界へようこそ。」

お客：「こんなことになるとは……祖父も喜ぶかもしれません。」

白金：「いや、こんなの普通じゃない

……！」

剛田：「普通である必要などない。ゴージャスタレ！」



## 全体構成と尺割

### 1. 第一幕：豪華な朝の始まり（20分）

目的：キャラクターの個性と設定を紹介し、作品のトーンを示す。剛田の「ゴージャス」な性格と白金の常識人としての立ち位置を描く。

#### ポイント：

- 剛田の優雅な日常と哲学（紅茶、静かな朝の時間を強調）
- 白金のツツコミ役としての存在感（剛田の過剰な振る舞いへのリアクション）
- お宝への期待感を煽るための伏線。

---

### 2. 第二幕：謎のお宝登場（25分）

目的：物語の核となるアメジスト包丁を登場させ、剛田の熱弁と白金の困惑

で笑いを生む。

ポイント：

- お宝（アメジスト包丁）の登場とその特徴（美しい輝き、用途不明な実用性の低さ）
- 剛田のゴージャス哲学が全開（包丁を「芸術」と呼ぶ、熱弁する）。
- 白金の一般常識と剛田の価値観の衝突（剛田の極端な発言に振り回される）。
- お客の反応（驚きつつも徐々に剛田のペースに巻き込まれる）。

---

### 3. 第三幕：実際に使ってみる（25分）

目的：アメジスト包丁の真価を実験し、さらに笑いを生むシーン。物の価値をめぐる剛田と白金のやり取りが見どころ。

ポイント：

- 剛田が実際に包丁を使い、豆腐を切る実験を開始。
- 白金の大反対（壊れそうな包丁を使うことへの不安）。
- 包丁が実際に豆腐を切る驚きの結果と剛田の「ゴージャス！」な評価。
- ここで包丁の実用性ではなく、「美的価値」が強調される。
- 笑いを交えながらも、包丁の特別な感を印象づける。

#### 4. エピローグ：ゴージャスな豆腐の味（15分）

目的：物語を感動的かつコミカルに締めくくる。「美」によって食材の味まで変わるという剛田の信念を描く。

ポイント：

○ 切った豆腐を試食する剛田と白  
金、そしてお客。

○ 剛田の「ゴージャスな味！」という  
発言をオチに、笑いと感動で締め  
る。

○ 包丁を売る・売らないの話題は自然に  
消え、作品全体の「ゴージャス哲学」が  
主題として際立つ。